

1. はじめに

二葉保育園は、1900（明治33）年に野口幽香と森島美根によって設立された。2人は当時、華族女学校付属幼稚園という現在の学習院の幼稚園保母をしていた。当時の幼稚園へ通えるのは生活に余裕のある中流以上の家庭の幼児であり、貧困層の幼児は取り残されていた。また当時の幼稚園は有産階級子弟の教育機関であるかのような観を呈していた。2人の通勤途中には貧民が多く住んでいる場所があり、キリスト教信者であった2人は、貧しく放置されている子どもたちを見過ごすことができなかった。そうした中で『あの貧しい道端の子ども達のためにフレーベルの幼児教育を理想通りにやってみよう』と思うようになっていった。2人は番町教会で出会った宣教師ミス・デントンの理解と協力を受け、慈善音楽会を開催し、その収益金で貧民のための二葉幼稚園を設立した。それは新宿麴町の借家で子ども6人からの始まりであった。

現在地に新築移転をして113年の歳月が流れているが、この間、幼稚園を保育園に、母子寮、小学部、乳児院等この地でさまざまな事業を展開してきた。二葉南元保育園は二葉保育園120年の保育の実践を継承している事業体として、これまで守り続けられてきたこと、大切にされてきたこと等を120年の歴史から4つの柱（建物、働き人、保育内容、行事）で考察していく。

1. 事業概要

1898（明治31）年 野口幽香・森島峰の貧児幼稚園設立の意志に対し、宣教師ミス・デントンの協力、援助により慈善音楽会を開催。収益の半分が幼稚園設立の費用にあてられた。

1900（明治33）年1月 新宿麴町区下六番町27番地で園児6名、保母1名で二葉幼稚園が始まる。

9月麴町区土手3番地町へ移転。園児46名。

1902（明治35）年 麴町下六番町48番地へ移転。

1906（明治39）年3月 鮫河橋へ移転（現在地）。園児120名、保母6名。

4月 保育料廃止、終日保育とする。

1911（明治45）年 夏休みなしの保育から夏休み期間中は半日保育へと改則する。

1912（大正2）年 夏休み半日制から全休制へと

改則する。

1916（大正5）年 二葉保育園に名称を変更する。園児265名、保母8名。

分園を内藤新宿南町（後の旭町）に開設。

1921（大正11）年6月 二葉保育園本園に「母の家」が付設され、10世帯を保護収容する。

1922（大正12）年9月 関東大震災の為、分園消失、本園も大破損。

1945（昭和20）年4月 本園に強制疎開の命令がでる。1週間後空襲で本園被災。

1950（昭和25）年3月 鮫河橋が南元町に改名。総合的児童福祉施設の1階を保育園として使用。園児43名、乳児院15名、母の家10世帯。

1951（昭和26）年12月 児童福祉法により二葉南元保育園として認可を受ける。

1962（昭和38）年 母の家事業を廃止。

1983（昭和58）年 園舎の全面改築を行う。園児61名。

2014（平成26）年 園舎の全面改築を行う。園児110名、職員52名。

2015（平成27）年4月 開所時間が7時～20時となる。一時保育事業開始。

2. 建物

二葉南元保育園の歩みは二葉保育園の全体の事業と深いつながりの中で展開していた。

二葉幼稚園は新宿麴町の借家でスタートした。しかし開園当初から園設置の場所を確保する事に困難し、二葉幼稚園が希望していた敷地の確保までに3回の移転を余儀なくされた。

名称を私立二葉幼稚園から私立二葉保育園へと改めたことは、新宿分園の設立に深い関連があり、その後の各種事業が拡張される契機ともなった。日露戦争、恐慌による貧民増大のなかで保母達は浅草の貧民窟を見学し、悲惨な状況に驚き、貧民窟のあるところには二葉保育園の分園を作ろうと決意した。東京府下多摩郡内藤新宿南町（のちの旭町）は新宿御苑に一部隣接した地であり、木賃宿の地として指定された経緯から、当時新たな貧民窟となっていた。その地は交通の便にも恵まれ、鮫河橋本園からも近く、格好の立地条件を備えていたことから、分園を開設し、徳永恕が主任となり事業を行った。

二葉保育園の事業は現在の乳児院が新しく出来

るまで、さまざまな役割を果たしてきた。その1つに母子寮の先がけである「母の家」(大正11年)の付設がある。当時は戦争で住宅を失ったり、夫の戦死による死別の母子家庭が圧倒的に多い状況であり、乳幼児の死亡率も増加していた。そこで、底辺社会の中でもとりわけ弱い存在である母子家庭に住居を与えることに着手した。昭和37年に廃止されるまで、大正13年、昭和3年、昭和25年、昭和26年に増設された。これは当時の親子の為に何をすべきかを考えて、それを工夫していく歴史であったと言える。

大正12年9月の関東大震災や昭和20年の東京大空襲で本園は大きな被害にあったが、さまざまな人々の支えがあり、この地域での事業は継続されている。

また、戦後の建物の老朽化により増築や改築を繰り返しながらも、常に子ども中心に考えた建物を工夫している。例えば、明治39年に東京三大スラムの一つである四谷鮫河橋(現南元町)に2階建てを新築した際、建物は南向きに九坪の保育室が五つ並び、各部屋の前に幼児が直接外へ出られるように斜めの木板が取り付けられていた。その他に子どもの為の浴室、寄付物品を入れる為の物置、休憩室、職員室を用意し、別棟として用務員、主任保育士の住居を建設し、野口らの幼稚園にける意欲がその設計にもうかがうことが出来る。その後の改築時も採光・風・子どもの動線・安全面を考慮した建物になっている。建物に関しては、時代のニーズ応える事業と、それを実現する建物をこの土地に建て、時には乳児院など他の事業部と共有しながら事業が進められてきた。

昭和40年、今まで乳児院と施設を共に使用してきたが、乳児院の改築に伴い、昭和43年より保育園は独自で事業を行うようになった。昭和56年に、昭和43年に移動した幼児棟の老朽化が著しく、園舎の全面改築を行った。乳児棟は国電の軌道及び橋架とわずかに四メートル道路を隔てただけのところに位置し、騒音並びに振動が激しく、保育に不適當な環境状態であること、管理棟・給食室等からかなり離れた所に位置している為全般的な運営管理、あるいは保育を円滑に進めていく上で支障をきたす事等を考え合わせ、乳児棟・幼児棟を統合し、不燃建物として全面改築を行なった。昭和59年3月に完成、4月より新園舎での保育が始まった。

平成に入り新宿区からの要請があり、当園も待機児童対策として定員を増やすこととなり、平成25年に改築する。少人数での保育を大切にしてい

たこともあり、乳児クラス(0~2歳児)は保育室を高月齢児・低月齢児の2グループのユニット方式にし、日中の保育は今まで通り少人数でゆったり家庭的な保育が出来る構造にした。3階にはステージのある大ホールを造り、日々の保育はもちろん、クリスマス祝会等行事でも使える仕様にした。1階には多目的に使用できるロフト付の小ホールを造った。屋上にはプールと畑を造り、プールは幼児クラス(3~5歳児)が使用、上にはパーゴラを張り日よけにしている。畑はさつまいもの苗を植えたりし、食育に役立っている。それに伴い、専用型一時保育室も開設した。隣接する乳児院とは、5月にこどもまつり、他にも合同避難訓練などを行い、事業は分かれていても連携は密になってきている。

3. 働き人

二葉幼稚園は、平野町子という、たった一人の保母から始まった。貧困家庭の子ども達を預かるだけではなく、養護と教育の面を合わせ持ち、感性豊かに、そして子ども達を清潔で健康かつ、子どもらしく育てたいという思いが保育内容や行事の中に見られる。これらを担った保母は保育以外にもさまざまな役割を持っていた。保母達は、親たちと親密な連絡を取り合う為にと、父母の会や家庭訪問を実施した。父母の会は一方的な説教の場ではなく、子ども達の作品を見せたり、成長の姿を話したりすることで、子どもの成長を通して親の成長を図り、喜びを共有する、優れた子育て支援の場であった。野口幽香はこの父母たちや職員のために保育園内でキリスト教集会を始めたが、これが後の二葉独立教会となり、現在の日本キリスト教団東中野教会に発展した。

また、母親に対する生活指導をすることが子ども達をより良く育てることになると考え、栄養指導の他、貯金の指導等もしていた。他にも毎週土曜日に100人以上の子ども達を入浴させ、爪を切り耳垢まで取り綺麗にしてあげていたが、家庭生活改善の為にも入浴介助の当番は母親達の交代制とし、保護者教育の場として活用した。母親達には内職を休んできてもらうので10銭払うが受け取らない母親もいた。保育料として半分はおやつ代、半分は義務貯金として親から徴収し、貯金は卒園時に手元に戻り、小学校入学時の着物、学用品等の購入に当てられた。このように貯蓄心を持つことが生活を向上させスラムから脱し生活を豊かにすると説くと同時に、現在だけでなく卒業後や将来に向けての土台作りとして援助していった。

このように、保護者に対する支援の仕方を実情に合わせて検討し、自立を妨げないようにするにはどのような援助の仕方が妥当なのか模索し、実行し、その結果を受けて最適な方向を見出していたと言える。

二葉幼稚園の経営は、大半は多数の賛同者の金銭や物品等の寄付から成り立っていた。その寄付者の過半数が野口と森島が勤務する華族幼稚園に直接、間接的につながっている人たちであった。当時の情勢にあって二葉幼稚園を大きく芽吹かすのも、野口と森島が華族幼稚園におればこそであり、両人の社会的人間関係の広がりやうかがうことが出来る。野口と森島は華族幼稚園での勤務を続け、二葉幼稚園には勤務を終えてから隔日に立ち寄るといった関わりで日常の運営は主任が行った。

開園当初の数年間、平野町子他数人が主任を務めたのち明治43年以降は、保育事業への並々ならぬ情熱と実行力を備えた徳永恕が主任となった。徳永は野口と森島の後継者であり、のちに「二葉を担う大黒柱」と呼ぶに至った女性である。徳永をはじめ保母達は、スラムの子ども達を護るには保育の垣根を越えて地域の生活改善を目指すことを考え、さまざまな事業を展開する。

当時のスラムの子ども達は普通の小学校へ通うのも難しかったこともあり、保育園の子ども達を妬んでいたずらを次々と仕掛け、それがいちじるしく保育の妨げとなっている事態があった。「二葉保育園第十八回報告書（大正5年）」によれば、彼等は塀を乗り越えて園内に跳び下り、窓から保育室に入っておもちゃを壊したり、園児を泣かせたり、保母から注意されると外へ逃げ、石や馬糞を投げ込むようないたずらをしていたとのことであった。そこで徳永達は、その不就学児達を敵対視するのではなく、自分達に引きつけることによって感化し矯正しようと考えた。

大正8年に新宿旭町分園に不就学児の為の小学部を付設することから始まり、保育室を利用して放課後の子ども達の為の少年少女クラブ、有志の教師による卒園生の為の教育機関の日曜学校を開く。また、母親達には古着類の寄付の中から着物を仕立て直させ収入を得る廉売部の事業、ボランティアの医師による薬代五銭の夜間診療部、安価で栄養の高い食事を提供する五銭食堂、母子寮等を通じて、底辺社会の人々の為に尽力した。これらの事業は地域の人々の働き口にもなった。

徳永は、園長を経て理事長に就任、幼児教育・社会福祉に貢献が認められ、1954（昭和29）年、女性初の名誉都民に選ばれた。

昭和25年、現在地に二葉南元保育園、乳児院、母子寮が建築された頃は、職員は3施設の区別なく働いており24時間の勤務体制であった。保母は母子寮と同じ部屋に住み込んでいたこともあり、夜勤明けでの休憩時間などは、保母が保育室の押入れで仮眠をとるといった時代もあった。栄養が行き届かない時代に休みも週1日の公休が取れるか取れないかの状態であり、かなりの過酷労働であった。報酬も少なく、厳しい労働にも関わらず、職員は一人でも多くの子どもや親を救うためにとこの使命感で働いていた。また、保母達は自分達の勤務が終わった後などに、保育の在り方についてよく話し合い、議論を重ね、よりよい保育を目指して研鑽を積んでいた。そして、震災、戦争、食料難など、さまざまな困難にも助け合って乗り越えてきた。

平成26年に新園舎が完成してからは職員も増え、幅広い世代の職員が事業を担っている。現在の保育園の52名の職員は、平均勤続年数が14年であり、比較的長く勤務している。長く働き続けているからこそ職員間の理解も深まり、いざという時に助け合うことが出来る職場になっている。

今も昔も子どもを大切に、地域のニーズに応じていこうという、基本的な姿勢は変わらないのではないかと。二葉保育園の事業を継続していくためには、それぞれの分野で一人ひとりの力量を十分に発揮して、良き職員のチームワークをつくっていくことが重要である。子ども達の未来を託されているものとして、希望と誇りをもって、二葉保育園の歴史の継承者として歩み続けていきたい。

4. 保育内容

明治32年に文部省によって「幼稚園保育及設備規定」が定められた。この規定の中で保育時間（1日5時間以内）、保育の項目（遊戯・唱歌・談話・手技）、配置基準（保育士一人に対して子ども40名まで）等が示された。

開所当時の二葉幼稚園の保育内容は、他の幼稚園と変わらず遊戯、唱歌、談話及び手技であった。しかし子ども達の置かれた状況を考慮し、家の手伝いをする為に役立つような技術も取り入れ、また子どもたちが順応しやすいように遊戯は多く取り入れていった。更に創設者2名はキリスト教信者であったので、通常の幼稚園では行えない宗教教育にも取り組んでいきたいとの思いがあり取り入れていった。当時の多くの幼稚園と違い二葉幼稚園は貧民の子が多く、園児は規則正しい生活や衛生観念が身に付いておらず、言葉遣いも悪かつ

た。二葉幼稚園報告には、登園すると洗顔するように促す、保護者の協力も得ながら入浴指導を行う等の記述がある。保護者の状況などを知り考慮していきながら、保母達は生活指導や衛生指導を行っていた。また貧困の中で生活体験が乏しかった子ども達は絵本を読み聞かせても登場する動物が分からなかった。こうした状況を考慮して動物園に行ったり園外に連れだしたりしてさまざまなことを経験させようとする姿があった。言葉遣いに関しても貧民街の中では綺麗な言葉はなかなか使われなかったので保母がその都度直していった。

鮫河橋移転後は、5クラスでの保育となった。当時の基準よりも手厚く保母1名に園児20名とし「家庭もなく躰もなき貧民の子どもに対しては尚更多数に致して保育者加減に致すよりは少数にして充分に見たいといふ希望から」この様になったと二葉幼稚園報告に記されている。

設立当初の当園は国の基準に則り1日5時間保育であったがこの頃には夏休みもなく、保育料も廃止し、また朝9時（厳密には7時から開所）から午後5時までの終日保育となっていた。当時の本園は「時間からすると孤児院のようでもあり、よく遊ばせるという点からすると幼稚園」と二葉幼稚園報告に述べられている。子どもたちの実態から、もはや幼稚園枠内の保育内容では子どもたちを守れないと考え、大正5年に二葉保育園と名称を改め救済事業となった。

この頃の保育内容の1つとして年長児は仕事して袋はりをしていた。この袋はりは徐々に上手に出来るようになり、駄菓子屋に買い取ってもらって飼育していたうさぎの餌代や遠足の際の交通費として使用していった。他にも、時には上の組の子どもに午前中に料理をさせておやつの時に食べる事もあった。

昭和25年～30年代は、地域の子どもの他に母子寮の子と、乳児院の幼児等を昼間一緒に保育していた。昭和27年の日誌によると讚美歌に始まり、お祈り、季節の歌、感覚遊び、リズム遊び等で午前中を過ごしたとの記述がある。生活指導としては洋服が汚れていたり破れていたりする子は身綺麗にする、汚れた手で物を食べると赤痢になる等を教えていた。

また当時は保育園児平均60名（私的児含む）、乳児院や母子寮の2～3歳児20名弱の80名を保母2～3名で保育していた。昭和30年頃まではこうして定員以上の子ども達を保育していたが昭和32年頃より幼児の数が減少し、昭和37年には母子寮を廃止したこともあり昭和38年には月平均

在籍約28名であった。こうした流れから乳児保育の充実を図ることを目標に建物設備の改善に取り組むことを計画し、昭和39年より実質的に少しずつ0歳児・1歳児の保育を進めることとなった。

昭和43年には東京都産休明け0歳児モデル保育所の指定を受け、産休明け0歳児保育の研究が当時御茶ノ水大学教授であった平井信義先生のグループによって行われた。

また、昭和45年に東京都特例保育適用保育所の指定を受けた。この頃より女性の専門職への進出等母親の常勤者が多くなり、今までは保育園の判断で早朝から夕方遅くまで保育をしていたが、東京都が制度として確立したことにより保母の人員配置が行われた。

南元保育園が何を大切に保育してきたかを考えた時、貧困や生活の困難のゆえに放置されていた子どもたちを、親たちも含めて幸せな生涯を送ることができる力をつけたいと願っていたと思う。特に子どもの中にある育つ力を信じ、一人ひとりを大切に保育するために、少人数での保育を目指しての保育であった。時代は変化し、地域や家族の保育へのニーズも変化してきているが、日々の保育は保護者と協力しながら、子どもたちの健康と生きる力を育て、家族とともに子どもの育ちを喜びあっている。

5. 行事

行事とは『子どもを主体とし子どもにどんなことを経験させたいかの試み』である。また、人間形成を培う幼児期の子ども達にとって、育ちに影響する要素がたくさんあるのではないかと考える。普段家庭では出来ない特別な楽しい経験を友達と共有することが出来る事も保育園ならではの大事な思い出作りとなる。子どもの時に体験したさまざまな行事の思い出は、大人になっても記憶に残っていると卒園児は懐かしんでいるようである。

大きな行事の1つでもある遠足は、設立当初、子ども達に「兎と亀」の絵本を読み聞かせたところ、出てくる兎を知らない子がほとんどだったということがきっかけであった。そこで、子ども達を動物園に連れて行き、さまざまな動物を見せるという方法をとったのである。人力車を引く仕事をしている保護者の協力により、16台の人力車に乗って上野動物園に行った。動物園では話に聞いていた象や熊や兎がいるのだから、その驚きと喜びは別格だったとの記述がある。保母達は、子ども達が動物を見る時間、お弁当を食べる時間を分刻みで計画しスムーズに動けるようにタイムスケ

ジュールを組んでいた。その後の遠足では市電を貸し切って上野の博覧会に行っていたとの記述もある。引率の保母は普段の先生では少なく、有志の方々をたくさん集めて子ども 10 名に対して大人 1 人を集めた。また、迷子にならないように 10 名 1 組になって、組によって違う色の記章（リボン）をつけたとの事だった。これは今日の遠足の計画と何ら変わりがないのではないか。また、遠足に行ったあとには保育の効果がおおいにあったとの記述もある。絵もよく理解するようになり、色々な動物を認識しておとぎ話等を理解し興味を持つばかりか、自分が知らないものは「これは何か」と問うようになった、とのことであった。

当園の中でも長い歴史のあるクリスマス祝会も設立当初から行われており、当時から番町教会の牧師に参加していただいていた。プレゼントに男児は凧、女児は羽子板、その他にも寄付の古着やお菓子を分けてもらっていた。また、ミス・ウエストン宅に招かれ、別世界に来たようなろうそくやランプの明かりが灯ったクリスマスツリーを見せて頂いたとの記述もある。現在のクリスマス祝会でも前述の事柄や降誕劇など形を変えながらも残っているものが多い。

他にも大きな行事の一つとして運動会がある。昭和 25 年の再建後は乳児院と建物を共有していたこともあり、運動会は同じ敷地内の園庭で乳児院と合同で行っていた。また、新宿区の連合運動会にも参加していた時代もあり、地域との繋がりも伺える。運動会やクリスマス祝会といった大きな行事は、日常の遊びの中で、ごっこ遊びに発展したり苦手なことに頑張って挑戦したり、出来るようになることで自己肯定感や自信にも繋がっていく。

保母は行事を通して、思いがけない子どもの一面を発見し、成長する子どもの姿に大きな喜びを感じることも多い。クリスマス祝会、運動会等、行事は時代と共に見直しながら継承されている。しかし「子ども達の喜ぶ姿が見たい」という思いは 120 年前から変わらない。また、その裏にはきめ細かな計画や配慮など保母の努力が必ずあった。120 年前からの行事とその思いを後世へ繋げていくことも大きな役割である。

6. おわりに

二葉幼稚園の事業が始まり 120 年がたった。今回の実践研究で、南元保育園そのものが二葉幼稚園の原点に立ち続けており、120 年の歴史の所産であることが分かった。二葉幼稚園の事業は 120

年の間にさまざまに枝分かれして今日の社会福祉法人二葉保育園になっている。今私たちは、南元保育園の事業を担っているが、この 120 年間のさまざまな活動のルーツを改めて学ぶことができた。また、その時代の子どもと親の為に何をすべきかを考え、建物を建てる、保育や行事の内容を考えるなど、様々な活動のルーツには意味があることも改めて分かった。

二葉保育園は様々な困難にも立ち向かい、乗り越え、常にその時のニーズに応じてきた。どんな困難にも子どもとその家族の為に、と立ち向かう姿勢には、創設者の深い慈愛の念を感じる。またそれは創設当初から、後援者のバックアップやバザー等に支えられてきたことも大きい。子ども達の未来を託されている私達が出来ることは、今後それぞれの分野で専門性を発揮し、子どもの個性を伸ばせるような取り組みをすること、そしてチームワークを発揮してこれからも二葉南元保育園を継続していくことが大切な役割だと考える。

改めて、南元保育園には二葉の活動の素晴らしい財産がある事に気付かされた。これを大事に、二葉幼稚園の延長線上にいる職員として 120 年の歴史の継承者として日々の保育に励んでいく決意を新たにした。

* 保母の記述は現在の保育士

【参考文献】

- ・二葉保育園 (1985) 「二葉保育園八十五年史」二葉保育園
- ・上笙一郎 山崎朋子 (1995) 「光ほのかなれども一二葉保育園と徳永恕」社会思想社
- ・貝出寿美子 (1974) 「野口幽香の生涯」二葉保育園
- ・蟻塚昌克 (2019) 「日本の社会福祉～礎を築いた人びと」全国社会福祉協議会
- ・文部科学省 (1981) 「学制百年史」帝国地方行政学会
- ・松本園子 (2007) 「『園誌』にみる二葉幼稚園創設期の運営一附・翻刻資料/二葉幼稚園『園誌』(一九〇〇～一九〇六年)」東京社会福祉史研究会
- ・中西和子 (2009) 「二葉幼稚園から二葉保育園へのあゆみに関する一考察 養護と教育を併せ持つ保育とネットワーク作りの模索」(日本児童教育専門学校)
- ・二葉保育園 (2001) 「展示会 二葉保育園 100 年のあゆみ一写真と資料が語りかける児童福祉の礎」